朝鮮語学習書による国語史研究

福島邦道

一

国語史を音韻史・文法史・語彙史などに分けて考えた時、朝鮮資料は他の資料とともにそれぞれの研究に役立っているが、特に朝鮮資料によった方が良い場合があり、このことは音韻史の研究にいちじるしかった。橋本進吉氏は『国語史の研究』（昭和十一年八月信濃木崎夏期大学）という小冊子の中で、これまでの国語史の研究には立派なものがあるが、そういう出来上ったものより、それを研究する根本の道筋、方法に重きをおいてゆくと、むしろごく特定の一つか二つの事項について話すのが適当であるとして、音声に関して、特に一つの音すなわちハ行子音の変化を中心にして講義をされたが、このはじめの資料のところで、朝鮮資料についても詳述している。

次に朝鮮人が日本語を書いたものがある。古いのは海東諸国紀といふものがある。これは日本の大体の地理歴史を書いたものである。中に日本で書くと同じ文字で書いた処は役に立たぬ。日本語の音を朝鮮で漢字で写したものは有益である。例へば、彦九郎を、比古仇老といふ風に書いてある。この字の漢字の朝鮮読みによってその頃の日本語の発音を知ることが出来る。かやうな例は少数ではあるが拠り所になる。

その次に捷解新語といふのが江戸時代の初に出来た。これは康遇聖の著したものである。徳川氏が交通を開いたに就いて日本語を知る必要からその教科書として作つたものであつて、「何々でござる」といふ風に平仮名で口語を書いたもので、その発音を諺文で書き、意味が朝鮮語で書いてある。それ故、諺文によつてその頃の日本語の発音を知ることが出来る。（一九ページ傍点筆者）

このように朝鮮漢字音やハングル（諺文）の発音から「日本語の発音を知る」ということは、朝鮮資料の持つ最大の利点とされ、この方法による研究は今日においてもより一層広範精密につづけられている。

一方、橋本氏の名著『国語法研究』（旧版一九七ページ新版六九ページ）の中に、「……といなや」についての研究がある。「……するやいなや」の意味で、江戸初期のものにかなり多く見えているとして、松平記、甫庵太閤記、役者論語からの挙例がある。甫庵太閤記にはもう一例山本主殿助十八歳国吉の御脇指を被下けり。頂戴仕といな

や、あへなくも左の脇へさしこみ、右へ引まはし、もはやと言上しければ、首は前に在。（巻十七　岩波文庫二二四ページ）

とあり、役者論語にももう一例

半畳五六枚打こむといなや、追々ばら〳〵と爰かしこより、半畳数多打こみける。（佐渡嶋日記　日本古典文学大系三六五ページ）

とある。この言い方については、すでに安田喜代門氏『国語法概説』（三〇八〜三一二ページ）の「文の構成」の中で論ぜられている。文の従属性について、たとえば、

いや、身共も、連欲しいと存ずる所に、あふたり、叶ふたる事でござる。（狂言、宗論）

の助動詞タリは、近代語ではタ（タル）と完結するのであるが、従属位に立つとタリのままで古代語の形式を保存するわけである。ところで、古代語で「……やいなや」があると従属化するのが常識になっているが、

やつと云ふて手合せをすると否や、はつし〳〵と打て来たれば、眼がくら〳〵とした。（狂言、鼻取相撲）

のように、「……といなや」となったのは、近代語形式をとったもので、すこぶるおもしろい言語現象であるとしている。

「……といなや」の管見の例を加えれば、遊仙窟抄に

西施ハ。天下ノ美女ナレバ。名ハシラネトモ。見トイナヤ。マギレナキ。西施ナリトシルガゴトシ。（巻四　十二オ）

スナハチ。竜淵太阿ト云。ツルギ也。コレヲホリイダスト。イナヤ。ソノユフベヨリ。斗牛ノ間ノ気。ウセミヘズ。（巻五　十三ウ）

ハジメイツルトキハ。猶劒トミヘシガ。水ニ入トイナヤ。竜トナリテ。水ソコニカクレケリ。（同右）

とあり、好色一代女に

十五位の女郎は。人やるといなや使とつれてくる人をよべ。（巻二　八オ）

とあり、前田金五郎氏によれば、武家義理物語にも

腥き風吹かよひ。人の身にあたるといなや。むつける程に、草臥つきて。（巻一　岩波文庫三六ページ）

とある。ちなみに最近流行の古語辞典類は「といなや」を狂言記から挙例しながら、橋本氏の学説には一顧もしていないのは、編修者の識見のほどがうかがわれよう。

こういう言い方は国内資料ばかりでなく朝鮮資料にも見出すことができる。捷解新語に

ただししやうくわんじそうしてやまいけなひとて御ざッたに
などやらくるといなや　またきあいけで　くいものもゑくわず
（巻一　二七ウ）

とあり、「などやらくるといなや」に ʻəs ti han ti ʻo mye sye pɯ tʻə とある。この朝鮮語について、中村完氏の御教示では、「どうしてか　来るとすぐに」の意味で、pɯ tʻə は、もともと「によって」「について」の意味であったのが、後に「から」となり、ここでは ʻo mye sye（来るとすぐに）の語尾の強調的な役割りをしているとのことである。

交隣須知にもある。東大小倉文庫本に

火薬　ログスリハ火ヲツケルトイナヤキウニトビデル（巻三73ウ）

とあり、これより古い形として、京大苗代川本には

火薬　エンシヨウハヒヲツクルトソノマヽキウニヲコリマスル（巻三39　複八五ページ）

とあり、「火ヲツケルトイナヤ」・「ヒヲツクルトソノマヽ」に pur ta hir syen cyeng　とある。この朝鮮語について、中村完氏によれば、syen cyang は「たとい……しても」の意味で、多くつぎに反語を伴なうのが普通で、ここでは、「火をつけるようなことがあればそれこそ」という気持で使われているとのことである。明治十六年版は、本文は

火薬　火薬ハ火ヲツケルトイナヤ起ツテデル（巻三50ウ　複二〇〇ページ）

とありながら、朝鮮語は、「といなや」に myan kos「……すればすぐに」になっている。删正本もこれとまったく同じである。明治三十七年版は、本文は変って

火薬　火薬は火をつけるが早いか発しる。（一六五ページ　複四〇八ページ）

となり、「が早いか」にあたる朝鮮語はやはり　myan kos　とある。古い写本類の朝鮮語が、すでに古語的な感じになっていたので、明治版では普通の素直な表現に変えたのである。交隣須知の諸本について該博精緻な研究をされた小倉進平氏(注二)は、「交際須知」の用語は、日本語にあっても、朝鮮語にあっても、時代によってかなりの相違があり、それらの変遷を語学的に研究することはきわめて興味あることであると言われたが、「といなや」についても、移してもって言えるのである。

語彙の研究は新村出氏に代表される。新村氏は朝鮮資料についての関心も非常に深く、『朝鮮司訳院日満蒙語学書断簡』（大正七年七月京都大学刊）の解説(注二)をされたり、鹿児島県苗代川から朝鮮語学習書を発見されたのである。したがって語彙の考証にも、たとえば、外来語のカイキ（甲斐絹）について、いろいろな宛字のあることをのべ、交隣須知にまでおよび

雨森芳州の旧著を刊した交隣須知には、改只紬（カイキチウ）と見えてゐる。（『東亜語源志』二六四ページ）

とあるが、語彙の研究にあっては、さらに引用してほしいものもある。それは、スワル（坐）ということばについて、眉がスワル、膳がスワル、みな固定安着の意で、江戸初期の俗文学からだんだん頻繁にでてくる動詞であり、

近世の字書類を見ると、船が岸の沙地や浅瀬などに固着した状態をスワル又スパルといってゐる。膠着の姿をさすのである。（『国語学叢録』一七一ページ）

という説明がなされているが、苗代川本交隣須知には次のような例がある。

甍　ハフニカラスガスワツテナキマスル（巻二49　複五八ページ）

スワツテに朝鮮語 'an ca をあててあるが、その解題で浜田敦氏は、朝鮮語 'anc 'ar には、人間がスワル意味だけではなく、鳥のような、人間以外の生物がトマル場合にも用いられるという、日本語のスワルよりもより広い用法があり、その影響でこういう言い方を生じたのであると言われている。

交隣須知の諸本からこのような「スワル」を求めると、小倉文庫本に

蝿　ハイカカヲニスワツテコソバユウゴザル（巻二15ウ）

とあり、朝鮮語は 'an ca とある。苗代川本（巻二18・複四二ページ）

は「トマツテ」（朝鮮語は同じ）とあり、明治十六年版も「トマツテ」（巻二12　複一五一ページ）（朝鮮語　'an cɯ）である。史料編纂所本に

皎々　シロイモノハ月ジヤ
団々　ダン〳〵トマルクスワツタ（巻四）

とあり、朝鮮語は 'an cas とある。苗代川本（巻四47　複一二六ページ）は、「タン〳〵トシテイツタ」（tɯ rəs）とある。これらの交隣須知の用例によれば、日本語の「スワル」は、今日より広い意味で用いられており、朝鮮語の用法とも関連するものがあり、日本語の言いかえや朝鮮語の対訳を参考にすることによって、新村氏の説は補強されると思うのである。

以上、橋本・新村両碩学に見られる朝鮮資料の扱い方についていえば、朝鮮語による対訳によって日本語を見直すという点には、なお未だしいところもあったのであり、朝鮮資料の狭窄性というようなことが言われるのもまたこれにつながる問題だったのである。そういう私自身も未熟な語学力のため、思わぬ過誤を重ねているのではないかと畏れているものである。

二

朝鮮資料には、捷解新語のような、朝鮮人のための日本語学習書と、交隣須知のような、日本人のための朝鮮語学習書とがある。国語史関係の今までの研究は、前者に関するものばかりで、後者に関するものは、資料の稀覯性もあって、ほとんど利用に供されることはなかったのである。たとえば、語彙史に関することであるが、頴原退蔵氏「貞門談林俳諧語彙」に次のような記事がある。

さはり　砂破利。不詳。投盃「麦食をたゝ一呑に熱心の、すなはち砂破利（サハリ）のかねは湯となる、朝鮮人沖津白波と打詠」。同「月をさきたてゝは匕（サン）をうらむる、土は土かねは砂破利にかへす秋、和物唐物目か明て露」（続俳句講座七巻三〇ページ）

「さはり」は苗代川本交隣須知に

鍮　サハリカネハコノゴロキレテ器ノ代ガタコフコサル（巻二52ウ　複五九ページ）

鑞　スヾ二十斤ト生銅九斤　合　フケハサハリカネニナルト申マスル（巻二53　複六〇ページ）

とあり、サハリに朝鮮語で nos soi とあり、真鍮であるが、朝鮮製の真鍮容器を「唐物」と詠んだのである。なお、サハリとサハチ（砂鉢）の相違については小倉氏（注三）の論考があり、通行の国語辞典類の説明はいずれも不分明である。

ところで、交隣須知などの朝鮮語学習書はすべて写本で伝えられ、明治になってはじめて刊行されたのである。明治初期の釜山における朝鮮語学習書について、大曲美太郎氏（注四）は次のごとく言われている。

朝鮮語の教授といつても交隣須知や隣語大方を骨子として之れに常談（人事篇・売買篇・古語篇に別たれ紙数僅かに十八枚、隣語大方の続篇の如きもの）と講話（日鮮官吏が交換する種々の挨拶の練習用として編集せしもの紙数二十一枚）とを添へて、対話と訳述とを生徒に奨励し、又輪講輪読を行つた。

右の「常談」は朝鮮語で syang mar また俗談 sok tam ともいい、本邦の俗諺のことである。「人事」とは本邦の挨拶をさす。「講話」は苗代川本が複製されたが、二巻四十五枚あり、釜山本よりく

わしくなっている。交隣須知については、苗代川本のほか、拙稿(注五)でものべたように、対馬通詞小田幾五郎による増補本があり、いずれも零本ではあるが、

巻二・巻三　済州島本よりの転写本　東京大学文学部言語学研究室小倉文庫蔵

巻三　対馬伝存本　九州大学文学部中村幸彦氏蔵

巻四　小田幾五郎自筆本　東京大学史料編纂所蔵(南葵文庫旧蔵)

がある。中村本は古写善本であるが、済州島本とほとんど同文なので、引用は便宜小倉文庫本によることとする。小田自筆本は、寛政七年(一七九五)の署名がある。

隣語大方には、朝鮮刊本と苗代川写本とがあり、ともに複製されている。安田章氏は朝鮮刊本の解題で、朝鮮刊本と苗代川本との先後について論じ、朝鮮刊本は日本の隣語大方をもとにしたものであり、隣語大方も元来朝鮮語学習書であったと推定されているが、まことに妥当なお考えである。ただし、朝鮮刊本は十巻あるのに、苗代川本はわずか四巻しかなく問題は残されていたのである。東京教育大学付属図書館蔵隣語大方古写本は九巻あり、隣語大方の原型を知るべきはなはだ貴重な資料である。はじめに詳細な漢文序(三枚)があり、本書成立の手がかりを与えてくれる。「東華溪叟金夢霖毗卿」なる者が記したもので、「時重光協洽之臨月也」とある。「重光・協洽」は「辛・未」である。中村栄孝氏の御教示によれば、朝鮮で隣語大方が刊行される以前の辛未の年といえば、一七五一年(宝暦元年)か一六九一年(元禄四年)かであり、前者をこの書の成立年代と考えられている。序文の中に「日本国対馬州伝五郎以伝語誠信地」などとあることから、中村氏は、伝五郎は対馬の通詞で、かれらの住居である倭館所属の建物に在留し、朝鮮語に堪能で、本書の成立に重要な役割を果たした人物とされている。さらに「伝五郎」なる人物を求めると、小倉氏(注六)によれば、対馬の「集書」という資料に、享保二年(一七一七)に対馬ではじめて大通詞の職名を設け、江口金七・加瀬伝五郎をこれに任じたとあるが、この加瀬伝五郎ではないかと思われる。日本の写本がもとであるということは、小田管作(幾五郎の子)の象胥紀聞拾遺(東京教育大　岡倉由三郎文庫本)に「朝鮮国編集スル所ノ隣語ヲ学ブ書冊」の「倭学書」に

隣語大方　本州ノ書写シ去ル

とあるが、本州すなわち日本にもとの写本があったということを示すものであろう。

以上が江戸時代に日本で作られた、日本人のための朝鮮語学習書であるが、ここに資料として使用するのは、交隣須知、隣語大方、講話の三写本および前二著の明治版と朝鮮版である。さきにものべたように、これらの写本は明治初期においてさえ容易に入手しがたかったのである。交隣須知について、大曲氏(注七)は、明治十六年対馬厳原より釜山に移住した対馬藩士のことばとして

芳州時代より転々増訂したる写本を探索致しましたが仲々得られませんのでヤット三巻目の一冊寛永頃の写本を知人に借りて一見することが出来ました。(福島云、寛永は古すぎる。)

と言われているが、この資料の伝存状態をよく物語っており、このことからも京都大学複製本の壮挙がわかるのである。引用にあたって複製本は「複」で示してある。

本稿でとりあげるのは、文法史上注意すべき副詞と準体助詞とであるが、考察にあたっては、いわゆる対照文法という方法によると

ころが大きい。今までに、日本語と朝鮮語とを対照的に研究したものとして、金沢庄三郎氏『日本文法新論』（大正元年刊）があげられるが、準拠すべき文献もなく、簡単なものであった。その後の各分野における研究成果を考慮しつつ、できるだけ対照的に扱ってゆきたいと思っている。

三

副詞の研究は、形態や機能については、近時いちじるしく成果をあげてきているが、ある時期における副詞の実態、特に現代語と意義を異にするものについては、研究が困難なこととあいまって、ほとんど進められていない。先年『国語副詞の史的研究』（大阪市立大学国語学研究調査冊子）なる書が刊行されたが、第三冊で挫折してしまったのは、惜しまれてならない。この種の通時的研究に利するため、朝鮮語学習書に見られる副詞をとりあげ、その当時における意義や用法を考えてみたい。朝鮮語による対訳は、さきにものべたように、日本語の意義を知るのに非常に有効である。山田忠雄氏に副詞「しかしか」についての精考（『本邦辞書史論叢』七五ページ）がある。「しかしか」はすでに諸辞典にも登載されている。「言泉」や「大辞典」には「そう思うように」「それ程までに」の語義を、「狂言辞典」には「しっかり」「はっきり」の語義を、「近世上方語辞典」には、①「たしかなさま、しっかり」②「はかどるさま、はっきり」③「あまり、めったに」の三つの語義を示してある。ところで、山田氏が問題にされたのは、「しかしか」の用法には、情態副詞としての用法と陳述副詞としての用法があることである。辞典類の語義としての口語訳は、文脈に応じて適宜に与えたものであって、もとより決め手があるわけではない。対訳のある外国資料をかえりみると、さいわい、コリャードの懺悔録には「しかしか」xica xica が三例あり、いずれも否定表現に用いられている。ラテン語の対訳によると、三例とも、その否定形を並列否定の neque…, neque…（……もなく、……もない）でおきかえているが、xica xica にあたるべきことばは見出されない。文意から考えれば、陳述副詞としての用法のようである。柴田武氏は、陳述副詞としての用法は九州方言を反映したものであると言われているが、懺悔録における九州方言の有無は、かつて土井忠生氏（「九大国文学」昭和七年二月）が論ぜられたように決め難い問題なのである。

さらに、朝鮮資料にも「しかしか」が見られる。捷解新語に二例ある。

いかやうにしてもどらしられたもしかしかしらいんでないないこれより申お（巻九7）

とねきの御きふんしかしかよう御ざなく候へども（巻十12ウ）

前の例は、改修捷解新語には

いかが。御かゑり。なされ。ました。やら。しかと。ぞんじ。ませいで。御ざりまする　○つかいおもって。これより。申まする。（巻九6ウ）

とある。

「しかしかしらいんで」には、ca syai mor ra とある。「知らない」は、現在は moru というが、河野六郎氏（注八）は、その古形を morar とされている。ca syai（現在は ca soi）は、副詞「仔細」で「くわしく」の意味である。「仔細」はほかのことばの対訳にも用いられる。たとえば、講話には

マワシカタノ役所ニイサイニゴ内通ヲ仰付ラレテ（複五一ページ）の「イサイ」に「仔細 ca syə」とある。改修本では「しかしか」を「しかと」と改めたが、辞典類の「しっかり」という訳語もまた肯えるのである。後の例は、対訳がなく、「然然」という宛字がなされている。古例によれば、「言泉」などの「然然」という宛字の方が、最近の古語辞典類のような「確確」より良いのである。ともあれ、捷解新語の「しかしか」は情態副詞で訳すのが適当であることになる。三ケ尻浩氏（注九）は捷解新語の注意すべき語彙の一に「しかしか」（ろくに……ぬ）――九巻七表をあげられたが、朝鮮語を考えての訳語とは思われないのである。ただし、問題はなお残ろう。朝鮮語においても、日本語のごとき陳述副詞としての用法があり、文脈上そのように訳した方がよいかどうかということであり、懺悔録の場合もそうであったが、私どもが外国資料を扱うにあたって、非力さを歎ずるところでもある。

いっそ

副詞「いっそ」については、小林好日氏に精細な研究（『方言語彙学的研究』一六二ページ以下）があり、拙稿（「国語」昭和三二年六月）もある。問題は、「むしろ」のような語義と、「非常に」「ほんとに」のような語義との使い分けも、国内資料によるかぎり文脈によって解するよりほかはなかった。朝鮮語学習書の「いっそ」も、

防　フセキニクイナラハイツソステサシヤレイ（交隣須知　巻三43ウ　複八七ページ）

トキニノゾンデカコツケマスルギハイカガシウゴサル故イツソマツスグニ申上ルニヨリ（講話　複四七ページ）

のように c'ər ha　すなわち「むしろ」の意味のものがすべてであった。教育大本隣語大方に

酒盛リガ面白ウテ日暮ニ西山ニテモ楽而忘ル返マシタニヨリイツソ夜明シニアソンデカエルヤウニイタシマセウ（巻二）

とあるのは、'a ɑ　「すっかり」「まったく」の意味であり、朝鮮版（複一六ページ）も明治版（複六七ページ下）も同じである。孤例ではあるが、両者のちがいのわかる適例といえよう。

おつつけ

湯沢幸吉郎氏『江戸言葉の研究』（三一七ページ）に「やがて、間もなく」と訳しているが、

今日　今日ハ日ガタカイニヨリヲツツケユカシヤレイ（交隣須知　巻一12ウ　複七ページ）

は、'is ta ka「後程、しばらくして」で問題ない。

かなり

現在使用されている「普通の程度」の意味より程度が高い。

去年　キヨネンノウサクハカナリニデキマシタ（交隣須知　巻一6　複四ページ）

は、mu tan hi「十分だ」のような気持である。明治版では

去年　去年ノ農事ハサウオウニアリタサウニゴザル（巻一7ウ　複一一八ページ）

と改められており、サウオウ（相応）にはやはり mu tan hə とある。サウオウは苗代川本にも数例あり、これも現在より程度が高い。

さつはり

三つの用法がある。苗代川本交隣須知には

快　サツハリトケツダンナサレテ双方コヽヂヨフゴザル（巻四

7 複一〇六ページ）

とあり、k'oai すなわち「快」にあたるものと、史料編纂所本にある

成　事ガ成テ心ガサツバリトシタ（巻四）

のように現在普通に使われるものと、小倉文庫本に

水墨　スミ絵ガサツバリトゴザリマスル（巻三70）

とある so tam hɐ 'oi 風雅にうまいのような意味とである。

すこぶる

国内資料と通じている。

徐　シツカニソロ〳〵ユキテモコンニチハスコブルユキマショウ（交隣須知　巻四32　複一一八ページ）

は、cyok hi すなわち「十分に」の気持であり、教育大本隣語大方にも

ヒダルサハスコブルヤンダダケニゴザリマスル（巻二）

とあり、「足 cyok」とある。このところ朝鮮版では「ひだるさはずんど（cyok hi）やみました」（複六ページ）になっている。佐藤喜代治氏（本誌五三集）は、語彙史の問題について、「頗」の語義の変化をとりあげ、程度をあらわす副詞などは、その変化が微妙で、変化の時期を確認することは容易でないとうったえられている。

せつかく

「わざわざ」の意味ばかりで、「力をつくして」の意味のものは見当らない。教育大本隣語大方にある

昨日ハ兼テ約束ノ日故ニサケ肴ヲセツカク用意シテ日ノ暮ルヽマデアイマチマシタニ（巻二）

は、ssur kes とあり、私にはよくわからないが、朝鮮版では pu tɐ（複一二ページ）とあり、「わざわざ」である。明治版では「充分 man 'i」（複六ページ）に改められている。

ななを

二つの用法がある。

雙馬　サウバガナヲ〳〵ヲナシヨフニカケマスル（交隣須知　巻三26ウ　複七八ページ）

これは、tɐ 'u k すなわち「その上、さらに」の意味で、松井利彦氏（「国語国文」昭和四三年四月）の言われる「かさねことば」としての普通の用法である。明治版では「イヨ〳〵 tɐ 'uk」（複一九四ページ）となっている。

抖擻　ナヲ〳〵セイシンヲミガイテワキマエサシヤレイ（交隣須知　巻四3ウ　複一〇四ページ）

この方は、ka ta tɐ ma とあり、明治版には ka ta turn 'ɔ（複二一〇ページ）とあり、「気をひきしめる」というような気持である。

なるだけ

ナルダケヲセワナサレテ（講話　複四八ページ）

to rok syɐ「するように」で意味はそう強くない。教育大本隣語大方に

ソノモトガタゴ推察下サレテ成丈ヲセ話下サレマセイ（巻五）

とあるのは、明治版に「ナルベク」（複八三ページ）とあり、ともに to rok syɐ とある。

ねつから

『江戸言葉の研究』（三三四ページ）に、まれに肯定の文に用いることがあるとしているが、交隣須知にもある。苗代川本に

催　サイソクヲネツカラヒノデルヨフニシテコタエラレマセヌ（巻四41ウ　複一二三ページ）

とあるのは肯定で、小倉文庫本に

屈　マガツタモノハネカラ用タヘヌ（巻三35）

とあるのは否定の文である。ともに朝鮮語で ʻa cu とあるが、明治版に ʻa cu（複一八七ページ）とあって、「まったく」などの意味である。

ひたすら・ひたと

両語とも交隣須知の写本類に多く見られる。苗代川本に

狂　キヨフランハムダナコトバカリヒタスラ申マスル（巻三63　複九七ページ）

移　ヤウツリシテユカシャルユヘヒタトアイヱマイトゾンジマスル（巻四33　複一一九ページ）

とある。ともに朝鮮語 ca ro とあり、「しきりに」の意味であるが、「ひたすら」「ひたと」は同義に用いられたと考えられる。

べつして

「別して」であり、『江戸言葉の研究』（三三四ページ）や湯沢氏『室町時代の言語研究』（二四二ページ）にもとりあげられている。交隣須知に

別　ベツシテヲカイホウ下サレマシテカタシケノウコサル（巻四33ウ　複一一九ページ）

とあり、pyer ro すなわち「別に」で現在も用いられている。

めつたに

現代語とちがって、近世では下に打消を伴なわないが、交隣須知でもそうである。苗代川本に

拌鼻　ハナヲフクコトヲメツタニスレバヒトガキサノフヲモイマスル（巻一49　複二六ページ）

とあり、小倉文庫本に

霍乱　クワクランハ食物ヲメツタニクウテ腸胃ニツモツテナリマスル（巻一70）

とあり、ともに hen pu ro すなわち、「やたらに、むやみに」の意味である。苗代川本の

癡　ヲロソカナモノハメツタニワロウモノチヤ（巻三65　複九八ページ）

には ʻu ʻum ʻur man hi とあり、「笑いをひどくする」のような意味である。

もやもや

近世語で、心がすすまず、いやな状態を言うのに用いるが、交隣須知にも

暑　ハナハダアツイニヨリモヤ〳〵イタシマスル（巻一6ウ　複四ページ）

とあり、ʻyak ʻyak ha ʻui とやはりそのような意味である。

ようやく

浜田氏の論考（人文研究　昭和二八年六月）があるが、朝鮮資料では、すべて kyai ʻo すなわち「かろうじて、やっとのことで」の気持で、「漸」という字で書かれていても、「しずかに」とか「だん〳〵」とかいう意味はない。

ろくに

山田孝雄氏の論考（『俳諧語談』一二三ページ以下）があるが、朝鮮資料には、肯定の言い方と否定の言い方とがある。捷解新語の

まづろくにいどらしられ（巻一2ウ）

は肯定で、p'yən hi「平」すなわち「楽に」の気持であり、小倉文庫本交隣須知の

裁　タツテクレテモロクニコシラヘテキヌニヨリ云テヤクニタヽヌ（巻三27ウ）

は否定で、明治版では「ヨク」（複一八四ページ）になっており、ともに car mos で、これは「良く」の反対の意味で、朝鮮語では否定表現を用いないで訳してある。

四

国語史を古代語と現代語という風におおざっぱに二分して考える時、その文法上の大きな違いについて、佐伯梅友氏（「大東文化大学紀要」昭和四〇年一月）は、数項目をあげ、その一項目として、用言の連体形が体言に準じて用いられる場合、

雨など降るもをかし――雨などが降るのもおもしろい。

というような違いがでてきて、現代語では連体形の下に準体助詞「の」がついて、そこで体言に準じられるのであると言われている。準体助詞「の」の成立は、きわめて重要な問題であるが、これについては、吉川泰雄氏に「形式名詞『の』の成立」（「日本文学教室」昭和二五年九月）があるにすぎない。狂言記をはじめ近世初期の多くの用例を捜しだされ、さらにこの「の」がどこから出て来たかを論ぜられている。本稿の第二は、この問題を朝鮮語学習書にあらわれた「の」によって再論しようとするものである。幸なことに、日本語の準体助詞「の」に対応する用法が、朝鮮語にも見られることである。河野氏（注一〇）によれば、朝鮮語には連体形に形式体言を結合させ、それに措定詞―'i―あるいはその他の用言で示す場合があり、そのもっとも典型的なのは kəs《モノ・コト》を用いる場合で、この場合 kəs は日本語の「の」に相当する。「ないのである」は「ないことである」で、連体形＋コト（kəs）＋デアル（'ita）の結合は現代の文章では非常に頻繁に用いられ、また、その結合では「行くのを見て」は、kəs 'ur となるのである。

隣語大方には一例見られる。苗代川本に

文字ノ分明ナノヲ求テ下サレタラバ（巻三　複一八ページ下）

とあり、教育大本（巻五）もこれと同じだが、朝鮮版では

文字の分明なを求て被レ下たらは（巻六7ウ　複七一ページ）

となっている。「のを」にあたる朝鮮語は kə sur とある。

交隣須知の増補本には非常に多くの用例が見られる。類別して用例をあげることとする。

「……のが」とあるもの

蓼　タデハ近ウ出タノガヨイ（小倉本巻二25）

斜眼　スガウノ人ハコチラヲ見ルノガヨソヲ見ルヤウニゴザル（同巻二71）

真珠　蚫玉ハ太ウテ丸イノガヨウゴザル（同巻三7ウ）

護　カボウテトガノアラハレデヌヤウニスルノガイントク（隠徳）デゴザル（史料本巻四）

「のが」の朝鮮語はすべて kə si とある。

「……のは」とあるもの

犢　竹ノ子ノ近ウ出タノハ黄イ牛ノ角ノヤウニゴザル（小倉本巻二4ウ）

竹　タケハ二色テ節ノ強イノハ女ダケデアリフトイノハ男ダケ

テコサリマスル（同巻二36）

沈香色　コウイロノヲビヲシタノハ書手デアル（同巻三17ウ）〔明治版「シタ人ハ」（複一八一ページ）〕

青天　ソライロヲヨウソメタノハウツクシイモノデゴザル（同巻三18ウ）

玄色　玄色ト云ウノハマツクロイ色ジヤ（中村幸彦本巻三）〔小倉本「云ウハ」〕

緑　モヨキノテクリキタノハヲサナイケイセイデゴザル（小倉本巻三21）

窺　ハサミシテ人ノスル事ヲヒソカニ知ルノハキノドクナカウセキデゴザル（同巻三53ウ）

譲　ジギスルノハ礼ニカナフ（史料本巻四）

「のは」の朝鮮語はほとんどすべて kə sun とある。

「……のを」とあるもの

樹　木デモフトイノヲ樹ト申マスル（小倉本巻二36）〔明治版「大キナ木ヲ」複一五八ページ〕

衾　カタト云テモチイサイノヲ衾ト云ウ（同巻三45）

嚊　ウソフイテゲイスルノヲカルワザシト云マス（同巻三50）〔明治版「モノヲ」複一九二ページ〕

比　タクラベテ見テヨイノヲエツテ出サレマセイ（史料本巻四）

元　イチバンハ其中ニテ第一ヨイノヲ云ウ（同巻四）

「のを」の朝鮮語はすべて kə sur とある。

以上「のが」「のは」「のを」の「の」に相当する朝鮮語は kəs すなわち「もの・こと」になっているのである。

これに対して、交隣須知の苗代川本にはわずか三例しかなく、しかも同じ所に集まってあり、一例は消してある。

藍　アイイロノヲワギキタノハ釜山僉使ジヤ（巻二58　複六二ページ）

草緑　モヨキノクワンタイキタノカ東萊令監デゴサル（同）

松花色　ウグイスイロノテクリキタノタレテアロフカ（同）〔小倉本「キタ人ハ」明治版「キタ女ハ」複一八一ページ〕

これらの「の」にあたるところは、接続的に用いられる —ni で訳されていて、kəs が見られない。

ところで、増補本では「の」が朝鮮語の「もの」に置きかえられているが、本来の「もの」は、たとえば、史料編纂所本に

遺　トリノコシタモノガ（kə si）三四品ゴザリマスル（巻四）

短　ミシカイモノハ（kə sun）ツイデツカエ（同）

捜　サガシテ見テカクシタモノヲ（kə sur）タヅネダセ（同）

とあり、「の」と同じに訳してある。

古代語の言い方である、「の」を伴なわないで、連体形が体言に準じて用いられる場合も、増補本には多くあり、その訳し方をしらべると、「連体形＋が」とある

辦　用意イタシタ物ハトリサバイテクウガヨウゴザル（小倉本巻二60）

貸　カツテツカウタモノハ早速モドシテヤルガドウリジヤ（同巻二62）

外感　風邪ハ表ニ発スルガ第一ジヤ（同巻二72）

進　スヽンデヲ目ニカヽルガドウリデゴザル（同巻二76ウ）

などは、いずれも kə si と訳してある。また、「連体形＋は」とある

横　ユガンダ心ノデルハマイナイヲ見タワケソウニゴサル（史料本巻四）

は、ko sun と訳してある。これらは「の」や「もの」があるのと同じ訳し方なのであって、体言に準じられているところを Kes ≪モノ・コト≫としてとらえているわけなのである。

準体助詞「の」がどうして発生したかについて、吉川氏は、たとえば塵芥集に多く見られる

出家たるの人、かたな（刀）さすべからず、

さうもつ（贓物）わけはぶくの時、

などのような「連体形＋の＋名詞」の言い方をあげて、「の」は本来領格（連体格）の助詞であり、このような言い方が一般化して準体助詞「の」が成立したのであると考えられている。なお、塵芥集は近刊『中世法制史料集第三巻』に収められている。

浜田氏（注二）は、このように連体格の助詞「の」から準体助詞が発生したとする説に反して、日本語と多くの点で文法的構造を共通にし、日本語の格助詞「の」に相当するものを持っている朝鮮語では、そこから、日本語の準体助詞的用法は発展していないのであり、むしろ「の」は形式体言「もの」の縮約形と解すべきではないかと言われている。浜田氏は、くわしい論証をはぶかれているが、増補本における諸用法をかえりみる時、「の」はやはり「もの」と同じように意識されたのであり、浜田説が裏付けられると思うのである。

以上、朝鮮語学習書が国語史研究に寄与することについて、副詞ならびに助詞をとりあげてのべてみたが、さらに広い視野に立ち、厳密な方法をとることによって、新たに寄与すべきものが多々出てくることが期待されるのである。

注（朝鮮資料に関する論著のみかかげた。）

一　小倉進平　「交隣須知」に就いて　国語と国文学　昭和一一年六月（京大刊『交隣須知』再録）

二　新村出　朝鮮司訳院日満蒙語学書断簡解説　芸文　大正八年二月（『東方言語史叢考』『新村出選集第三巻』再録）

三　小倉進平　国語特に対馬方言に及ぼした朝鮮語彙の影響　方言　昭和七年七月（『朝鮮語方言の研究下巻』再録）

四　大曲美太郎　釜山港日本居留地に於ける朝鮮語教育　附朝鮮語学書の概評　青丘学叢第二四号　昭和一〇年

五　福島邦道　交隣須知の増補本について　言語と文芸　昭和四三年三月

六　小倉進平　釜山に於ける日本の語学所　歴史地理　昭和九年二月

七　大曲美太郎　朝鮮語学所と「交隣須知」の刊行　ドルメン　昭和一〇年三月

八　河野六郎　『朝鮮漢字音の研究』　昭和四三年九月刊

九　三ケ尻浩　朝鮮の訳学書に用ひられた国語の検討　朝鮮　昭和一〇年九月

一〇　河野六郎　朝鮮語（『世界言語概説下巻』）

一一　浜田敦　接続　国語国文　昭和四三年四月

〔追記〕

本稿で紹介した朝鮮語学習書は京都大学より複製刊行された。浜田氏「副詞など」（「国語国文」昭和四四年一月）は、この方面の第一人者のもので、是非参看されたい。